

研究・調査報告書

報告書番号	担当
587	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
How does variability in alcohol consumption over time affect the relationship with mortality and coronary heart disease? 経時的なアルコールの消費量の変化はどのように死亡率と冠動脈心疾患との関係に影響するか?	
執筆者	
Britton A, Marmot MG, Shipley MJ.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction. 2010 Apr;105(4):639-45.	
キーワード	
アルコール消費量, 平均量, コホート研究, 冠動脈心疾患, 死亡率, 変動	
要 旨	
目的： アルコール消費量と死亡リスクと冠動脈心疾患 (CHD) の関係を検討するため，追跡期間中の飲酒量の変化を調査した。	
方法： 1985-1988年に the Whitehall II study に登録した 35-55 歳の男性公務員 5,411 人を対象として前向きコホート研究をおこなった。アルコール消費量は，15 年間に 5 回報告させた。追跡期間中に死亡率と致命的な CHD，臨床確認した致命的でない心筋梗塞，明確な狭心症を確認した。	
結果： 平均飲酒量に関わらず飲酒量が変動する飲酒者は，飲酒量の変動が小さい飲酒者に比べて総死亡率のリスクが上昇した (ハザード比 1.52 ; 95% CI 1.07-2.17) が，CHD の発症ではリスクの上昇はみられなかった。平均飲酒量を用いると，ベースライン時の飲酒量に比べて，中等度飲酒者に対する CHD の推定リスクが少し高くなる。	
結論： 経時的な飲酒量の変化の影響を検討するために，複数回の繰り返し測定が必要だった。経時的な飲酒量の変化を考慮せずに，ベースラインで一度だけ測定された飲酒量をもってリスクを解釈するときは注意が必要である。	